

60

## 二十世紀前半中期の英国における血液（型）研究と 医学研究推進について

香戸美智子

大阪府

本発表においては、二十世紀前半より中期にかけての英国における新知識としての血液（型）研究とそれを支援する医学研究推進および支援に関連する機関等の考察を行う。1900年、カール・ラントシュタイナーは血清学上の新科学知識である、人類の血液型（現在のABO式）を発見し、1930年にはそれによってノーベル生理学・医学賞を受賞している。この血清学上の凝集因子の発見は、十九世紀ロンドンの病院でジェームズ・ブランデルにより実際に再開された輸血における危険性、すなわち一部の成功があるとともに死亡例など不確実性が存在することの困難さから大きく前進することになり、いわゆる近代輸血への道を開いたと言える。血液型命名法については当初はI, II, III, IVというモス法とジャンスキー法が混在していたが、1930年代に国際的にA, B, O式表示に転換されてゆく。ABO式における適合および不適合性が明らかになるにつれ、輸血の安全性がより向上する。しかしながら、例えば、Rh因子の発見は1940年であったことからわかるように、まず二十世紀前半においては、医学者や医療関係者にとってはABO式だけの処理では不十分であり未知の存在が予測される部分も多く、また関連する分野は複数に広がりつつある状態でもあった。例えばさらなる新種の血液型の存在の可能性や疾患人種との関わりなどにおいてである。このような当時の医学者・科学者の世界において、その、ラントシュタイナーが発見した新しい科学・医学知識はさらなる解明を二十世紀前半から中盤にかけて積極的に推進されてきたことが理解されうる。このような二十世紀における様々な血液に関する研究の推進を鑑みたとき、英国では医学研究機関がより積極的にそれらを奨励し支援したものとして捉えることができる。もちろん英国には関連するいくつかの支援団体があるが、その代表的な機関として果たされてきた役割は大きいと考えられる。本研究においてはその医学知識が輸血療法においてさらなる有効性を保持しつつ新たな潜在的な新知識への探求、研究が実施され、あるいは結果として実現されてきた過程を、そのような観点から検討する。当時の英国における医学者および科学者への支援との関連から検討を行う。ABO式の新知識が発見され欧州を中心に広がっていく当初の1910年代や20年代は第一次世界大戦期前後であり保存のためのクエン酸による抗凝固剤開発や技術向上などにより輸血療法が徐々に進んでゆくが、他方、ドイツにおける血液研究所とは異なり、英国においてはむしろ後年の1930年代に血液研究所が最初に設立される。医学研究としてレースなどを中心におもに医学研究会の支援のもと進められる。またその過程から疾患や民族などとの連関の研究もなされる。1940年代においては戦時中の記録としては残念ながら少ないが、一部戦後には研究所が国際的支援を受けていたことも理解できる。戦後の1950年代頃においても新たな手続きによって同様の研究が支援され継続されていたことが捉えられ、結果として複数の著作物の出版などが実現されてきたことが理解されうる。